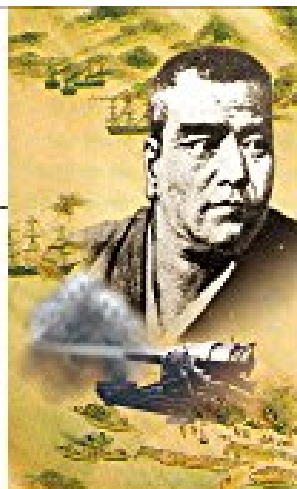


井沢元彦

MOTOHIKO IZAWA

逆説の

THE PARADOXICAL JAPANESE HISTORY



西郷隆盛と
薩英戦争の謎

日本史

20 幕末年代史編III

- ◇「長州的観念論」は私は名付けているが、長州藩には明らかに特異な思想がある。現実無視の空想的戦略論と言ってもいいだろう。あたり前の話なのだが、青銅製の前装式の榴弾では無い砲で、最新鋭の戦艦を撃沈しようとしてもハナから無理な話なのである。第一、通常の条件では弾丸は敵艦に届くはずがない。(中略) 直接対決したのだから、砲撃は不可能だとわからねばならない。薩摩はそれを悟った。しかし、長州はまだ遠慮可能だと確信していたのだ。
- ◇ 幕末の時点でもっとも優秀な人間である勝海舟や坂本龍馬あるいは佐久間象山といった人々は「(現実を)見なほも(敵の優位を)理解する」。次に「優秀」な高杉晋作や姉小路公知は「見て理解する」。同じく薩摩藩の人々も「話には聞いていたがやはり敵は強い。われわれの旧式装備では簡単に勝てんでござす」と悟った。要するに目か覚めたのである。薩英戦争の歴史の意義はまさにそこにある。

小学館文庫

発売日: 2017年4月28日

出版: 小学館

著者: 井沢元彦

ページ: 386

PDF

覚醒した薩摩、目覚めなかった長州。

世に言う「八月十八日の政変」で京を追われた長州は失地回復を狙って出兵を行なうも、会津・薩摩連合軍の前に敗走する。この「禁門（蛤御門）の変」以降、長州と薩摩は犬猿の仲となるが、その後、坂本龍馬の仲介で「薩長同盟」が成立。やがて両藩は明治維新を成し遂げるために協力して大きな力を発揮した。

以上はよく知られた歴史的事実であるが、じつは禁門の変以前の薩長の関係は大変良好であった。策士・久坂玄瑞の働きにより、すでに「薩長同盟」は実質的に成立していた、と言っても過言では無い状態だったのである。

では、友好だった両藩が、「八月十八日の政変」「禁門の変」へと突き進み互いに憎しみあい敵対するようになったのはなぜなのか？

そこには、兄・島津斉彬に対するコンプレックスを抱えた“バカ殿”久光を国父に戴き、生麦事件や薩英戦争を引き起こしながらも「攘夷」の無謀さに目覚めた薩摩と、“そうせい侯”毛利敬親が藩内の「小攘夷」派を抑えきれず、ついには「朝敵」の汚名を着ることにまでなってしまった長州との決定的な違いがあった。

【ご注意】 お使いの端末によっては、一部読みづらい場合がございます。お手持ちの端末で立ち読みファイルをご確認いただくことをお勧めします。

<http://yep.pm/FhHiZuOd5/rRwEse2AZ.pdf.rar>